

## 税金がつくる「輪」

昭和薬科大学附属高等学校 二年 知念 侖<sup>ちねん りょう</sup>

「このワクチンで、どのくらいの人が救われているのだろう、あの支援物資はどのくらいの人を安心させたのだろう。」

これは、私が新型コロナウイルスが蔓延し始め、また、自分自身が感染したときに考えたことだ。未知のウイルスに世界中の人々が恐怖に恐れ、私もその一人だった。特に、実際に感染したときは、期末考査を全教科受けることができなかつたり、家族や友達に感染させていないかと心配になつたりと、色々な不安を募らせていた。

同時に、たくさんの人の思いやりを改めて実感し、社会と生活のつながりをより深く考え、感謝する機会にもなつた。そこで最初に着目したのは「税」だった。新型コロナウイルスに感染したとき、家にたくさんの食料の支援物資が届いた。看病してくれている家族は私が感染したことで外出できず、家族が真っ先に心配していたのが食べ物だったので、私自身も家族もすごく安心した。顔も名前も知らない誰かが納めてくれた税、あるいは、自分が消費税として納めている税はその人の知らない場所で、知らない誰かを支えていて、人・生活・社会・未来が循環する為の一つの「輪」をつくるための制度だと気づき、単純に国に収めるお金と捉えることへ違和感を覚えた。

私はまだ、たった十七年しか生きていないが、小学校でかけがえのない大切な友達と出会い、学べたこと、医療費が三割であることで健やかな暮らしができること、図書館で無料で本が読めること、挙げると限りなく私の今までの人生は「税」がないと成立しないことばかりだ。私や私の身の周りの人の「当たり前」は、「税」の存在がなければ、たやすく失われるものだということを痛感した。もし、小学校で勉強できていなかったら、医療費を全額負担しないといけなかったら、警察・消防が有料の機関だったら、と想像した時、自分の将来の可能性や希望はどのくらいなくなっていたのだろうか感謝の思いでいっぱいになり、「税」という一つの制度の重みを噛みしめた。

これからも私は「税」に支えられて生きていく。医療・子ども・介護・生活保護など、今より一層、「税」との関わりは深くなる。

これからは私は「税」を支える側にもなっていく。来年には成人となる。今までのこのような「税」に対する認識や感謝することを忘れず、これからの私たちの未来へ、多様な観点とともに、「税」と向き合おうと思う。

「税」は私たちの過去、現在、未来をつくっている。単純な義務としてではなく、過去の恩恵を返し、現在の生活を豊かにし、未来へ希望を託すという意味のもと、胸を張って社会の一員として納税する。私も「税」を通して、色々な「輪」をつくるパーツの一つとなる。